

ここでは「ノイズ・ギャラリー」および拙稿「テクノイズ・マテリアリズム」で紹介したアーティストに関連したディスクを中心に取り上げていくことにする。

まずはメゴ関係から、[s-1]はレーベルの創設者でもあるレーモン・パウアーとアンディ・ピーパーのユニット、ジェネラル・マジックのファーストCD、全編ダンス・ミュージックのパロディのような倒錯的なア

イデアに満ちている。彼らはピタ(=ピーター・レーバーク)との共作も多く、ジェネラル・マジック&ピタ、レーバーク&パウアー名義の作品もリリースされている。そのうちの1枚、タッチからのアルバムに続きリリースされた10インチ・シングル[s-2]は、フランス・デ・ワード(カポテム・ミュージック)の電子音楽レーベルから、ここからは口エル・メールコップもリリースしている。ノ

イズと沈黙の狭間を行き来する、緊張感のある電子音響。[s-3]はウィーンの実験ラジオ局クンストラジオの開局10周年を記念したミニCDで、クンストラジオの音源をピタが過激にDJミックスしている。ほとんどオリジナルにしか聴こえないテクノイジイな世界である。ファーマーズ・マニユアルは、音楽のみならず、ヴィジュアル・アートやマルチメディア方面でも活躍する

注目の三人組。メゴからのデビューCD [s-4]はCDエクストラになっており、一筋縄でいかないミステリアスな仕掛けが楽しめる。タッチがメゴと協力して設立したレーベル、トレイからのセカンド作 [s-5]はエクストラ仕様ではないものの、サウンド的には前作を上回る奇怪な電子音響&リズムが詰め込まれている。タッチ傘下の新レーベルOR(オア)からの最新



Feature: music/noise — 21st-Century Alternatives

テクノイズ・ジオグラフィ  
佐々木敦  
SASAKI Atsushi

特集 音楽/ノイズ — 21世紀のオルタナティブ

## DISC GUIDE

### ノイズに迂回する複数の道

伊東乾  
ITO Ken

ノイズ・ミュージックを「行為する身体がシステムを引き受ける音楽」と捉えて、そこに至る幾つかの道筋をディスクガイドのかたちでなぞるとき、出発点にはジョン・ケージの《プリベアド・ピアノ》が相応しいだろう[1-1][1-2]。単にピアノという楽器のシステムにnoiseをもち込んだという語呂合わせ以上に、「システムを引き受ける」ことが偶然性を正面から許容するという点で、ケージのスタンス転換は決定

的だ。だから、「ノイズの零度」=「音楽の零度」として次にデイヴィッド・テューダーによるケージの《4分33秒》の演奏を挙げることにしよう[1-3]。行為する身体が沈黙というシステムを引き受けること、そこには「楽音」もなければ「雑音」もない、あらゆる還元を一端拒絶した振動=ヴァイブレーションの風景が広がっていた。そこで、意図をもって「音楽作品」を作るのではなく、新たなシステム(とりわけエレク

トニックなシステム)を組み上げる=コンポジットして、それに委ねるかたちで、ケージたちは音楽の、作曲の、新たな地平を見たのである[1-4]。その予言をより徹底して追求したテューダー[1-5][1-6][1-7][1-8]に「ノイズの一つの始源」を見たのは小杉武久だが、その小杉たち「グループ『音楽』」の試みもまた「ノイズのもう一つの始源」の位相を占めている[1-9]。また60年代の一柳慧や「フルクサス」の運動

[1-10]、あるいは少し遅れてジェームズ・テニーの音楽[1-11]や、日本なら鈴木昭男[1-12]の仕事も押さえておきたいと思う。ポスト・ケージと言え、忘れてならないのはモートン・フェルドマンの仕事である[1-13]。かれの拡大された時間感覚は、客体化不可能なシステム中で、きわめて穏やかなかたちで聴き手に新たな自己定位を求めるかのようだ。ここからライオン・イーノのアンビエント・ミュージックま



アルバムは初回のみボーナス・ライブ盤が付いた2枚組[s-6]。鼓膜を破りかねないほどのラウドな高周波エレクトロ・ノイズ、複数のレーベルよりセンス抜群のダンス・チューンを続々と発表して注目を浴びつつあるリチャード・ポタズニックの初のフル・アルバム[s-7]は、メグとしてはやや異色のファンキーなエレクトロ集(だがやはり変)、ジャズ系のベーストだったとい

うラクスチャン・フェネスのデビューCD[s-8]のほうは、いかにもメゴ的な反則だらけのエレクトロ作品。現時点での最新リリースであるドイツ人ヘッカーのアルバム[s-9]は、ローファイ電子機器によるノイズ・アンビエント・ミュージックである。ウィーンの世界では、ダンス系とノイズ系がごく自然に混じりあっていることを如実に伝えるコンピレーションが[s-10]。フ

アーマーズ・マニュアルやフェネスといったメゴ勢に加えて、世界各国からドラムベースやエレクトロ・ジャズ系の最先端のミュージシャンたちが参加している。日本からは池田亮司とAUBEがエントリー。ロエル・メールコップの作品群[s-11][s-12][s-13]は、いずれも驚くべき繊細さをもった電子音響の秀作である。彼とフランス・デ・ワードによるテクノ・デュオ

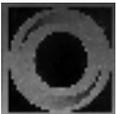
ゴームと、メールコップと同じTHU20出身で、現在はコンピュータによる音作りに専念しているイオス・スモールダースのスピリット7インチ盤[s-14]をリリースしているのは、オランダのV2が新たに立ち上げたミニマル・テクノ専門レーベル、オーデオNL。ここからはゴームの「ダンスابل」な12インチも出ている。[s-15]は、オヴァルの過去のアルバム



s-1  
GENERAL MAGIC  
Frantz  
MEGO010



s-2  
REHBERG &  
BAUER  
(No Title)  
KORG PLASTICS



s-3  
PITA  
ri.ci.cle  
ORF KUNSTRADIO



s-4  
FARMERS MANUAL  
No Backup  
MEGO008



s-5  
FARMERS MANUAL  
Fscck  
TRAY2



s-6  
FARMERS MANUAL  
Explorers\_We  
OR SQUISH04

s-7  
POTUZNIK  
Amore Motore  
(...Autobahn)  
MEGO011



s-8  
FENNESZ  
Hotel Parallel  
MEGO016



s-9  
HECKER  
IT iso16,19.75  
MEGO014

i-1  
JOHN CAGE  
The 25-Year  
Retrospective  
Concert of  
the Music of  
John Cage  
Wergo WER6247-2



i-2  
JOHN CAGE  
Sonatas &  
Interludes  
mode 50



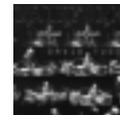
i-3  
JOHN CAGE  
I Have Nothing to  
Say and I Am  
Saying It  
American Masters  
cag 010



i-4  
JOHN CAGE  
Variations  
Legacy 439



i-5  
DAVID TUDOR  
Neural Synthesis  
Nos. 6-9  
Lovely Music lcd1602



i-8  
DAVID TUDOR  
Rainforest  
mode 64



i-6  
DAVID TUDOR  
Microphone  
Cramps crscd116



i-7  
DAVID TUDOR  
plays Cage &  
Tudor  
Ear-Rational ecd1039

i-9  
Music of  
group ONGAKU  
HEAR sound Hear002

での距離は(サティやサウンドスケープ論をもち出すまでもなく)僅かなものである。また、続く世代からジム・オルークのしなやかなシステムも聴こえてくるだろう[i-14]。カール・ストーン[i-15]らのカリフォルニアのコンポーザー=パフォーマーたち、あるいはジョン・ゾーン[i-16]の仕事なども、ポスト・ケージの視野で捉えることができる。

「ノイズ」をめぐる地下基は、ポスト・ケ

ージの地平の中だけに留まりはしない。例えばエレクトロニクスと音楽とが出会った1940年代末期、ケージの「チャンス・オペレーション」に先駆けて沈黙=ノイズの諸相と直面した「ミュージック・コンクレート」。ビエール・シェフェール[i-17]らの試みは、やがてビエール・アンリらのほとんど暴力的なシステム駆動音楽によってノイズ・ミュージックに直結するだろう[i-18]。ミュージック・コンクレートの投げかけ

た問題意識は大変に深く、その結果彼らの後継者たちは必ずしも狭義の「音楽」に収まり切らない「音のドキュメント」へと拡散してゆく。サンプリング・ミュージックから映画の音声にいたるそのスペクトルの中では、フランソワ・ミュージー+ジャン・リュック・ゴダールの、シネマ《ヌーヴェル・ヴァーグ》の完全サウンドトラック盤CD[i-19]を特筆しておこう。「音楽」と「サウンド・エフェクト」、あるいは「言葉」「声」

「鳴き声」といった峻別は、ここではさしたる積極的な意味をもたない。こうしてみると「ゴダールを聴く」とは、沈黙の零度という位相でシステムを引き受ける行為だと、改めて知るのである。同じ位相でリュック・フェラーリの仕事[i-20]も捉えることができるかもしれない。

エレクトロニクスと音楽の出会いを考えるうえで、もう一つ忘れてはならないのが「音響合成」(シンセサイジング)である。

からセレクトされた日本独自編集盤。最初に聴くならこれだろ。オヴァルことマーカス・ポップと、日本でも人気の高い電子ポップ・ユニット、マウス・オン・マーズのヤン・ヴェルナーの二人によるミクストリアのアルバム[s-16]では、ブライアン・イマーノのアンビエント作品がヴァージョン・アップしたようなオプスクアな音響空間を聴くことができる。オヴァルとア

ルバム「ドク」を共同作しているクリストフ・シヤールのCD[s-17]は、現実音を精緻に加工した秀逸なサウンドとともにテキストや映像データが大量にコンパインされたCDエキストラである。カーステン・ニコライが運営するノートンは、彼自身の作品だけではなく、レーベルとしてもおおいに注目に価する。リリースはCDもアナログ盤もすべてクリアに統

一されており、一貫した美学を感じさせる。シリーズの最初の作品[s-18]はo(サイン!)ことミカ・ヴァイニオ(パンソニック)と共同で行なったインストールのサウンドトラックで、いつものミクロトンとは異なった持続的な電子音響が収録されている。[s-19]のウィリアム・パンスキーのプロフィール等は不明だが、1982年に行なわれた短波ラジオによるパフォー

マンズの記録である。まもなくリリースされるはずの[s-20]は、かつてアメリカ最初のアンビエント・テクノ・レーベル、サイレントのオーナーであり、PGR、ヘヴンリー・ミュージック・コーポレーション等複数の名義で作品を発表していたキム・カスコーンが、本名で初めてリリースするコンピュータ・ミュージック。以前の作品にはあったロマンチズムは払拭され、幾何



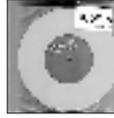
s-10  
VA  
Chill Out  
SABOTAGE CD30



s-11  
ROEL M EELKOP  
2(KYOKU)  
STAALPLAAT  
SfmCD011



s-12  
ROEL MEELKOP  
2(BLAUW PLAATJE)  
MEEUW MUZAK 008



s-14  
JOS SMOLDERS/GOEM  
(No Title)  
AUDIO.NL003



s-18  
o/NOTO  
MIKRO MAKRO  
NOTON04  
PASTERFUMUSICdr006



s-17  
Undirected  
1986-1986  
CHRISTOPHE  
CHARLES  
MILLE PLEATEUX  
mp33



s-15  
OVAL  
Iso Fabric  
TOKUMA JAPAN  
TKCB-71277



s-16  
MICROSTORIA  
\_sn\_Ding  
TOKUMA JAPAN  
TKCB-71276



i-10  
FLUXUS  
Anthology  
Cramps ant18.11



i-14  
JIM O'ROURKE  
disengage  
STAALPLAAT CD048



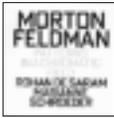
i-12  
SUZUKI AKIO  
Soundsphere  
Het Apollohuis



i-17  
PIERRE  
SCHAEFFER  
L'oeuvre musicale  
INA Gram 1006/9



i-11  
JAMES TENNEY  
Selected Works  
1961-1969  
artifact recordings  
art1007



i-13  
MORTON  
FELDMAN  
Patterns in a  
Chromatic Field  
Hat Art 2-6145



i-15  
CARL STONE  
Mom's  
New Albion 49



i-16  
JOHN ZORN  
Angelus Novus  
Tzadik tz7028



i-18  
PIERRE HENRY  
Interieur/Extérieur  
Philips 436 132-2

初期のシュトックハウゼンの試みの後、最も律儀に、倫理的な審級でシンセサイザーと向き合った一人がピエール・ブーレーズである。ワトソン・クリックによるDNAの二重らせん構造の解明が端緒となって、過去の記憶(とりわけ戦時の)を宙づりにしたまま人間の本質的な問題を、ごく限られた要素の組み合わせ(なにするたつた4種の塩基の配列情報=セリ

述しようとするセリエリスムの基本思想。人間と世界のあらゆる音との関係は「配列」をもって確定できる、というのが、ブーレーズたちの「トータル・セリエリスム」の本質的な意味ははずだった。だが現実の「楽音」を粗っぽいセリ=音列の思考で統御しようとする目論見はただちに打ち砕かれ(《構造》《ポリフォニー-X》[i-21])、ブーレーズたちはシンセサイザーの音響合成原理に目を向ける。あらゆる可

聴音は正弦波の組み合わせで合成できる(と当時の彼は確信した)。だとすれば、その組み合わせ=配列情報を適切にセリ=化すれば人が関知するあらゆる音のシステムとのあいだに新たな音楽の修辭学を構築できるはずである。そのような確信はブーレーズの《ボエジー・ブル・ブヴォアール》を生み出すが、結果は作者の満足できるレベルではなかった(ブーレーズは後にフランス国立音響音楽研

究所IRCAMを設立して作品《レパン》でこの夢を果たそうとした。ちなみに、ポスト・ブーレーズのアンチ・セリエリスムから「聴取可能な響きそのもの」へ物理的にアプローチする、いわゆる「スペクトル楽派」の運動が生まれてきた。より節制的なジェラール・グリゼ[i-22]や、より非選元的なリスタン・ミュライコの仕事[i-23]など、重要なアプローチがここに位置づけられる。セリエリスムの原点に目を戻

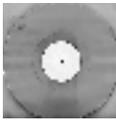


学的なデジタル・サウンドになっている。  
タッチからの《0°C》とほぼ並行して制作が進められたという池田亮司の[s-21]は、オランダ、スターブラウトからのリリース、「タイム」と「スペース」の2枚のミニCDから成る作品で、池田の時間論・空間論をかいま見ることができる。  
続いて、何枚かのコンピレーションを紹介する。[s-22]はMERZBOWへのトリビ

ュート・アルバム、ジム・オルーク、パナソニック、バーナード・ギンター、レーバーク&パウアー、オウテカといった名だたるアーティストたちが、それぞれMERZBOWをリミックスしている。ハーシュ・ノイズを加工して静寂電子音響に仕上げたギンターの手腕には脱帽させられる。このアルバムのコンパイラーでもあり、自身もMERZBOWの何十曲かを厳選に接

合した興味深いトラックを寄せているハズウェルことラッセル・ハズウェルは、サイモン・ターナーやパナソニックのエンジニア、ライブPAでもあり、タッチ、アッシュ・インターナショナル、オアのデレクターでもあり、また現代美術のアーティストとしても注目されつつある要注目人物。メゴからソロCDをリリースする予定もあるという、そのハズウェルとマイク・ハーデー

ング(タッチ)がプロデュースした[s-23]は「無」をテーマにした傑作2枚組コンピ。パナソニック、レーバーク&パウアー、オヴァル、ダニエル・メンシエ、ラルフ・ウエホウスキー、CM・フォン・ハウスウォルフ、ジョン・ヒューダック&バーナード・ギンター、M・ペーレンス、J・スモールダース、ジョン・ダンカン、エドワード・グラハム・ルイス、池田亮司、メルツパウなど、テク



s-19  
**WILLIAM BASHINSKI**  
Shortwavemusic  
NOTON07

NOW  
PRINTING

s-20  
**KIM CASCOE**  
Blue Cube  
NOTON 12CD



s-25  
**DISINFORMATION R&D2**  
ASH INTERNATIONAL  
ASH9.2



s-21  
**RYOJI IKEDA**  
Time and Space  
STAALPLAAT



s-22  
**VA**  
Scumtron  
BLASTFIRST  
BFFP138CD

s-23  
**VA**  
A Fault In The  
Nothing  
ASH INTERNATIONAL  
Ash2.6CD2



s-26  
**VA**  
Chikyu(u)  
ASH INTERNATIONAL  
#3.6



s-27  
**VA**  
Scatter  
ASH INTERNATIONAL  
#3.5

i-19  
**JEAN-LUC GODARD**  
Nouvelle Vague  
ECM 1600/01



i-22  
**GERARD GRISEY**  
Accord 201 952



i-23  
**TRISTAN MURAIL**  
Ades 205 212



s-24  
**VA**  
Antiphony  
ASH INTERNATIONAL  
#3.4



i-28  
**LUIGI NONO**  
Prometeo  
EMI Classics 5552092

i-21  
**VA**  
Donaueschinger  
Musiktage  
1950-1990  
Col Legno 31800



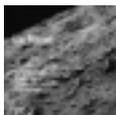
i-24  
**KARLHEINZ STOCKHAUSEN**  
Electronic Music  
Stockhausen Verlag 3



i-25  
**KARLHEINZ STOCKHAUSEN**  
Gruppen, Carre  
Stockhausen Verlag 5



i-26  
**LUIGI NONO**  
La Fabbrica  
Illuminata etc.  
Wergo WER6038-2



i-20  
**LUC FERRARI**  
Electronic Works  
BVHAAST CD9009



i-27  
**LUIGI NONO**  
Das atmende  
Klarsein etc.  
Col Legno 31871

せば、この流れからシュトックハウゼンの《少年の歌》[i-24]や《グレルペン》[i-25]、あるいはノーノの《ラ・フアップリカ・リュミナータ》[i-26]などにも目を配ることができる。やがてテープの上に情報が固定された「電子音楽」は、「ライブ・エレクトロニクス」化してノイズの地平に接続してゆくことになるだろう。ここでは特にノーノの《ダス・アトメンデ・クラールザイン(息づく清澄)》[i-27]や、日本で98

年夏に初演される大作《プロメテオ》[i-28]を挙げておこう。並行する流れで「インスタルメンタル・コンクレート・ミュージック」ヘルムート・ラッヘンマンの仕事[i-29][i-30]を見れば、ノイズとポスト・セリエルの壁一つの距離がはつきり感じられる。すぐ向こうにはアンサンブル・モデルンとフランク・ザッパのコラボレーション[i-31]もあるではないか。  
セリエリズムへの重要なアンチ・テー

ゼの幾つかもまた、ノイズと至近距離にあると言える。例えばアイニス・クセナキスの仕事、初期のテープ音楽の試み[i-34]も重要だが、彼の設計したUPICシステムによる、基本的な素材音周波数の確率分布(確率波と呼ばれる)から大規模な時間構造にいたるまで、同型の数式アルゴリズムで計算してゆく「ダイナミック・ストカスティック・シンセシス」の仕事(例えば《Gendy3》など)[i-35]は、ライブで

聴くと、耳というより直接脊髄に働きかけてくる強烈な音楽だ(意識が芽生える前、受精直後で生死が定かでない記憶のような、何かヤバイものを感じさせられる気がする)。

俗に「ノーン・クラスター」(密集音塊)と呼ばれる手法も、むしろシステムと人間の知覚との関係の冷静な観察から生まれたものである。ジェルジ・リゲティの《アルティクラツィオン》[i-32]など初期の電子

ノイズの世界を一望するには最適。[s-24]は電磁波やラジオバンドを用いた硬質の音響作品。[s-25]で知られるディスインフォメーションのリミックスを集めたものだが、コンビとしても楽しめる。アトム・ハート、ペーレンス、ブルース・ギルバート、カボテ・ムジック、ズビグニュー・カルコフスキー、クリス&コージー等。[s-26] [s-27] [s-28]は、それぞれ日本(ユタ・カワサキ、

丸谷功二、MSBR、アキラ・ヤマミチ、タマル、山中透)、アメリカ(ケヴィン・ドラム、J・ヒューダック、ジム・オルーク、アース、D・メンシェ)、ヨーロッパ(フランシスコ・ロベス、プットプット、ヘッカー、フェネス、ト等)の先鋭的なサウンド・クリエイターを集めた3部作。アッシュの上部レベルのタッチの最新レーベル・コンビ[s-29]には、パナソニック、クリス・ワトソン、パイオ

スフィア、フィリップ・ジェック、レーバーク&パウアー、ディスインフォメーション、ファーマーズ・マニュアル、B・ギルバート、スカラ等の楽曲に、ガムランやアフリカの現地録音が絶妙に編集されている。なお、タッチの最新譜[s-32]は元キャバレー・ヴォルテール、元ハワートリオのワトソンによる美しいフィールド・レコーディング。オアの[s-33]はノイズ界の注目株

の緩急に富んだ摩擦音響作品である。P16D4のリーダーだったR・ウエホウスキーの作品を総勢50組のアーティストがリミックスした圧倒的ボリュームの5枚組[s-30]には、新旧の実験音響作家が勢ぞろいしている。そして手前味噌ながら筆者が運営するレーベルのコンビ[s-31]には、ヒューダック、レーバーク&パウアー、オルーク、ハウスウォルズ、ウルトラサウン



s-28  
VA  
Decay  
ASH INTERNATIONAL  
#3.9



s-29  
VA  
Sampler.3  
TOUCH T\_ZERO\_3

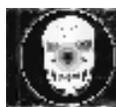


s-30  
VA  
Tulpas  
SELEKTION SCD024



s-31  
VA  
meme000CD

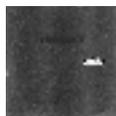
s-32  
CHRIS WATSON  
Outside The Circle Of  
Fire  
TOUCH TO:37



s-33  
DANIEL MENCHE  
Vent  
OR HOLDS5



s-35  
VAINIO,  
VAISANEN,VEGA  
Endless  
BLASTFIRST  
BFFP147CD



s-34  
PANASONIC  
Vakio  
BLASTFIRST  
BFFP118CD



s-36  
PAN SONIC  
BLASTFIRST



i-29  
HELMUT  
LACHENMANN  
temA etc.  
Disques Montaigne  
mo782023



i-31  
FRANK ZAPPA  
The Yellow Shark  
WEA R2 71600



i-32  
GYÖRGY LIGETI  
Artikulation etc.  
Wergo WER60161-50

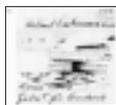
i-33  
GYÖRGY LIGETI  
Mechanical Music  
SONY Classical  
SRCR2167



i-34  
IANNIS XENAKIS  
Electronic Music  
EMF CD003



i-35  
IANNIS XENAKIS  
Gendy3 etc.  
NEUMA 450-86



i-30  
HELMUT  
LACHENMANN  
Salut für  
Caudwell etc.  
Col Legno 31804



i-36  
CONLON  
NANCARROW  
Studies for Player  
Piano Vol. I & II  
Wergo WER6168-2

音楽はその端緒を開いたが、リゲティは現在にいたるまで、また器楽作品でも一貫して、知覚=世界認識の方法という問題から逆説的な作品を生み出し続けている。例えば自動演奏楽器による作品集[i-33]は端的な例だろう。リゲティが高く評価する、コンロン・ナンカロウの自動ピアノ作品[i-36]、あるいはポスト・ケージとリンクする、初期ミニマル、とりわけループを使ったステイヴ・ライヒのフェーズ・

シフト・ミュージック[i-37]なども、この近傍に位置づけられる。リゲティのオペラ《グラン・マカーブル》[i-38]、あるいはマウリツィオ・カークゲルの《エキゾティカ》[i-39]などにも触れておきたい。

もう一つ重要な問題として「声」のノイズ性が挙げられる。古くはディーター・シユネーベルの声の仕事があるし、60年代以後、AT&Tベル研究所のマックス・マシューズらによる電子的な音声の分析・

合成技術が本格的に機能しはじめる[i-40]。音声の電子解析からはヴァンコ・グロポカールの「ディスクール」シリーズなどの器楽曲からハインツ・ホリガーの《フネウマ》などオーケストラ曲まで、様々な作品が生み出された。もちろん、ホリガーの《詩篇》[i-41]のような合唱曲や、キャシー・パーベリアンらのソロ・ヴォーカル・パフォーマンスは言うまでもない。声とデジタル・テクノロジーの交差点では、湯淺

譲二の先駆的な仕事は重要だ。またポーリーン・オリヴェロス[i-42]やステュアート・デンプスター[i-43]らの「ソニック・メティテーション」も音響システムと身体ダイナミックな関係性という点で特筆しておくべきだろう。そんな眺望から、システムと身体の方方法論という地点に立つて高橋悠治の《エゲン》[i-44]を聞きなおせば、また新たな響きを感じることが可能なのではないだろうか。



ド、ペーレンス、池田亮司、杉本拓、スコラ、タマル、スティルアップステイバ、ローレン・マザケイン・コナーズが収録されている。

既に紙数も少ないが、他の注目すべきアーティストを何人か挙げてみて、テクノイズを代表するアーティストといえるパナソニックは、最近パナソニックと改名した、彼らのデビュー・アルバム

[s-34]は決定的な名作。その後のシングルではややマンネリな部分もあったが、スーサイドのアラン・ヴェガと共演した[s-35]や、プラモデルのような箱に入った7インチ盤2枚組[s-36]では、初期のラディカルズムを取り戻している。[s-37][s-38]はいずれもミカ・ヴァイニオのソロ、テク的なリズムは取り払われ、鋭利な実験的電子音響が剥き出しになっている。ポスト・

ノイズのもう一方の極といえるバーナード・ギュンターについて詳しく触れられなかったのは残念だが、[s-39][s-40]を聴いてみれば、その独創性はすぐさま了解できるだろう。彼のレーベルからも2枚挙げておく[s-41][s-42]。いずれも精密さを極めた超ミニマル音響作品である。

最後に期待の新鋭を二人、[s-43][s-44]のマシュー・トーマスはオーストラリア

出身、シャープな接触不良系の電子ノイズの一部で絶賛を浴びている。[s-44]と同じオーストラリアのドロボーからデビューしたフランソワ・テタスの[s-45]は、B・ギュンターとオヴァルが共作しているような素晴らしい刺激的なアルバムである。



s-37  
PHILUS  
Tetra  
SAHKO15CD



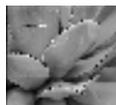
s-40  
BERNHARD  
GUNTER  
Impossible Grey  
METAMKINE MKCD023



s-41  
FRANCISCO LOPEZ  
Belle Confusion966  
TRENTE OISEAUX  
TOC963



s-44  
MATTHEW THOMAS  
remodulation  
DOROBO0015



s-38  
MIKA VAINIO  
Onko  
TOUCH TO:34



s-43  
MATTHEW THOMAS  
Architecture  
UNDEFINED REC  
UDRCD001



s-39  
BERNHARD GUNTER  
Un Peu de Neige Salie  
TABLE OF THE ELEMENTS 31



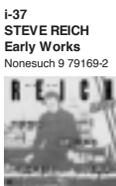
s-42  
JOHN DUNCAN &  
BERNHARD GUNTER  
Home, Unspeakable  
TRENTE OISEAUX  
TOC964



s-45  
FRANCOIS TETAZ  
The Motionless World  
Of Time Between or  
The Drunken Toxicab of  
Absolute Reality  
DOROBO 014



i-40  
VA  
Computer Music  
Currents 13  
Wergo WER2033-2



i-37  
STEVE REICH  
Early Works  
Nonesuch 9 79169-2



i-39  
MAURICIO  
KAGEL  
Exotica etc.  
DG 445 252-2



i-43  
STUART DEMPSTER  
Underground Overlays from  
the Cistern Chapel  
New Albion 13



i-44  
VA  
SPACE THEATRE  
BM G BVOC-7355



i-38  
GYÖRGY LIGETI  
Le Grand  
Macabre  
Wergo WER6170-2



i-41  
HEINZ HOLLIGER  
etc.  
Atelier Schola  
Cantorum 4  
cad 800944



i-42  
PAULINE  
OLIVEROS etc.  
Deep Listening  
New Albion 22



i-45  
GIACINTO SCELSI  
Quattro Pezzi per  
Orchestra etc.  
Accord 200612



i-46  
JEAN DUBUFFET  
Musical  
Experiments  
Mandala 4871

身体とシステムという見地から最後に裏技を三つほど挙げておこう。ジャチント・シェルシの特異な作品群[i-45]の多くは、シェルシ自身がアナログの電気ノイズ楽器を繰り返し即興演奏して、その録音を第三者に探検させるというプロセスを経て作られた。一時は「シェルシの盗作問題」として騒がれたが、これほどラディカルに「行為する身体がシステムを引き受けること」によって作曲を貫徹した例

は他にはないだろう。記名性や能記の他者性といったレベルまで、「シェルシ問題」は終わらない議論をいまま誘発している。そのように「ノイズの古層」に分け入ってゆくと、長らく心を病んだシェルシのみならず、心身の日常分節の臨界点に踏み込まないわけには行かない。とどめを刺すのはアントナン・アルトーのラジオ放送禁止録音《神の審判と決別するために》だろう。しかし、私たちは「起源」が伝説の

みならず「いま・此処」にも開かれていることに気づかねばならない。さまざまな「障害」をもつ身体と音のシステムの交差点に立つ、ジャン・デュビュフエの《音楽の実験》[i-46]は、ノイズの地平の上を広げる。忘れかけていた青空を思い出させてくれる。[資料協力/SPECIAL THANKS TO: 高見一樹+TOWER RECORDS]